

# 信濃教育

## 許す力

もう四十年も前の話になる。私が初めて担任をしたクラスでの話である。一年生の時、五人の女子生徒が問題を起こした。生徒だけが悪いのではない。生徒に楽しく充実した学校生活を提供できなかった担任の私にも責任がある。いずれにしても中学生としてしてはいけない行為であった。

その子たちが三年生になった十二月のある放課後のことである。五人の内の二人の生徒が職員室の私のところに来てこう聞いた。

「先生、一年生の時のこと、高校へ出す書類に書きますか。」

私は、すぐには何のことかわからなかった。少し考えて、あのことかと思ってこう答えた。

「えっ、何のことか忘れたなあ。」

「ありがとうございます。」

それだけ言つて、二人は深く頭を下げて職員室から出て行つた。

ことの顛末を知つたのは、十年以上上つた同級会である。

「先生、あの時私たちは誰が先生に聞きに行くかを決めて、後の三人は待つていたんだよ。それで待つている三人に『先生忘れたつて言つてくれたよ』と報告をして、みんなで教室で泣いたんだよ。」

子どもたちの中にはずっと一年生の出来事が心に重く、そして暗く残つており、高校受験を控えて心配になったのだろう。その後彼女たちは、生徒会活動や部活動などで活躍し、充実した中学校生活を送つたのだが、たつた一度の失敗を引きずつていたことを、その時私は知つた。伊集院静の『許す力』という本がある。これは「大人の流儀」というシリーズの中の一冊である。私はかっこいい大人になりたいくてこのシリーズをすべて読んだが、なかなかうまくはいかない。しかし、伊集院の言うように、人が幸せに生きるために、許す力は重要な力であるように思う。

実はあの時、私は本当に忘れていたのだが、伊集院は「許さなくても忘れることだ」とも言つているのである。